

国際前装銃連盟委員会 MLAIC' s 24thWorld Championship における日本の火縄銃銃器審査と課題 (2010年8月開催)

須川薫雄 (しげお)

(前装銃世界大会とは) およそ半世紀ほど前に、アメリカや欧州で国内的に行われていた古式銃競技の国際組織を作り、世界的大規模前装銃射撃の歴史、文化のあった国々に声が掛った。日本にも参加要請があった。但し、大きな国では幾つもの団体があるので、各国の NRA (ナショナル・ライフル・アソシエーション) の加盟団体が代表することになり、日本でも (社) 日本ライフル射撃協会の元に日本前装銃射撃連盟が結成された。2年に1度、各国で「世界大会」、その間の年に「ゾーンチャンピオンシップ」、日本は環太平洋国、その他の国は欧州選手権と二つに分かれる。古式銃においては当初はオリジナル銃だけで実施していたが、1990年頃より同じ競技でレプリカ銃が承認された。現在、加盟国は28カ国、本大会には24カ国が参加した。ISSFルールを適応する。

種目はあらゆる前装式小銃、拳銃、散弾銃、の現在は63種目(チーム競技含む)がある。日本の火縄銃に関しては、タネガシマ(立射)、ナガシノ(同チームイベント)、ヒザダイ、タンヅツ、ノブナガ(同チームイベント)の6種目がある。下、競技風景と取材



1 競技に使用する銃の銃器審査

銃器審査は専門の審査員を代議員会議が任命し、オリジナル銃は、その銃の銃身、ロック(カラクリ)、サイト(目当て)、ストック(台)、その他付属品(着剣装置、負い皮)などのオリジナル性を審査する。特に台と銃身の間に接着剤、塗料などで密着を増す仕組みは厳重にみられた。しかし銃の種類が多く、従来、日本の火縄銃は日本の連盟にまかされず簡略に行われた。日本の銃刀法では銃は改造できないということが知られていたが細かい点は曖昧なままに実施されていた。レプリカ銃の規定は、オリジナル銃と同じような機構、材料、形状で

造られたもので、近代銃の考え方で製造されたものは修正を求められる。第 24 回大会より、日本と欧州の火縄銃に関しては、日本チームが審査を実施することになり、独自の検定シール、日本国内で使用しているものの英語版、オリジナルは金色、レプリカは銀色を持ち行った。



そのほか欧州の前装銃に関してはこのようなテーブルが 3 個造られ、そこで「ガンコントローラー」認定された係員が国別に決められた時間に射手は審査を受ける規則であった。日本では筆者が「ガンコントローラー」に任命された。

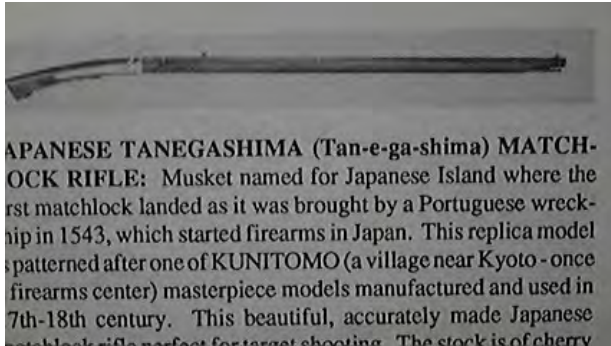
2 日本の火縄銃の人気とレプリカ銃

欧州においては 100 年間ほどの歴史しかなかった火縄銃であるが、日本の鉄砲が代表する形で、一部欧州型の銃が入り、今回計 120 挺、170 名の参加を得た。レプリカ銃が認められてから日本の火縄銃はブームになり、多くの国々の選手が参加するようになった。火縄銃競技には、肩付け式の欧州の火縄銃も参加できるが、ほとんどが日本式の火縄銃であった。

日本の火縄銃のレプリカ（複製品）は、主に 2 種類に分かれる。

1、自作したもの 2、スペインやイタリアの銃器メーカーが製造品。前者の自作したものは、実物を研究し同じように製作したものがほとんどだが、まったく実物はみないで、写真だけで製作したものも見られた。長い銃（全長）130 cm ほどの銃と短筒に分類され、最近では短筒の種類が多く、また参加者も多い。しかしオリジナル銃の参加者は少ない。

あるベテラン射手によれば価格的に 20 万円ほどの複製品でないと、安定した記録は出ないとしていた。



JAPANESE TANEGASHIMA (Tan-e-ga-shima) MATCH-LOCK RIFLE: Musket named for Japanese Island where the first matchlock landed as it was brought by a Portuguese wreck-ship in 1543, which started firearms in Japan. This replica model is patterned after one of KUNITOMO (a village near Kyoto - once firearms center) masterpiece models manufactured and used in 7th-18th century. This beautiful, accurately made Japanese matchlock rifle is perfect for target shooting. The stock is of cherry

デキシー・ガン・ワークスが 20 年ほ

ど前発売した国友系レプリカ火縄銃、価格は数万円くらいであった。

2、 スペインの銃は 15 万円くらいの価格で手頃で比較的良い。用心鉄が外したタイプなどある。短筒の例 この銃が一番多かった。

3、



各種の

銃器メーカーカタログ

3 審査で出たレプリカ銃の 3 つの問題

1、セットトリガー

複式の引き金で、1 段階で解除し、2 段階で落ちる、従って引き金を比較的完全に軽くすることができるが、日本の火縄銃はもともと引き金が軽くそのような仕組みはない。欧州型（ニュールンベルグ）レプリカ火縄銃にセットトリガーが付加した例。2 例あった。ニュールンベルグ式火縄銃は 16 世紀の初頭、短い期間しか使われていない。しかしセットトリガーは 18 世紀半ばが嚆矢と聴いている。16 世紀初期の火打石銃にこの仕組みが採用されたという説もあり慎重なる審査が必要である。これらの手製の火縄銃はバネも強く、銃身も長く、おそらく命中率は良かっただろう。これらはスイス、東欧からきた選手のものだった。



引き金が二つあることに注意

2、 左利き用火縄銃

欧州型ニュールンベルグとボヘミアンタイプの左用が各 1、2 例出てきた。元は欧州には 19 世紀趣味用の小口径管打ち銃まで左利き用の銃はなかったそう。しかし日本に左利き用火縄銃があるから左利き用火縄銃は承認という解釈をされてしまった。日本にある左利き用は、ある専門家の観察では上田で出たものが嚙矢であり、後に新しく奈良、熊本で登録された。競技にこのように自作してくる根幹は「何でも鑑定団」であったかもしれない。



左利き用、セットトリガー

現在、タンズツの左利き用は現物を見ないのでレプリカ製作承認は出てないが、そのうち「何でも鑑定団」に出てくると、これは単なる事実だけでなく日本前装銃射撃連盟としても審査をさせていただきたい。もちろん法的には出来ないが。(上ボヘミアン、下ニュールンベルグ)

3、 実物を見たこともなく製作した異様な形状



火皿を上から見たことがなかった

のだろう。東欧の個人製作のレプリカ短銃

4、 その他、素材、備品など将来予測される問題

鉄、様々な良い素材が使用されているが、ステンレス製素材は認められてない。少なくとも銃身に関してはかなり質の高い鉄が使われている。欧州型火縄銃は鉄のロックだが、日本の短筒は真鍮製がほとんどであった。

発火装置に関しては、火縄、火打石、口薬などでその定義の検討を要する。火打石に関してはマグネシウム系の人工石が使用されたことがあったが現在は禁止されている。火薬に関して、スイス火薬は、純然たる黒色火薬ではないと推定されるが、黒色火薬の燃焼とほぼ同じなので、問題とはなっていない。近代的な火縄が開発された場合の処置などを予測しておくべきだろう。

弾丸、前装銃ではソリッドな鉛弾丸であるが、装甲弾丸はあったのであろうか。常識的には装甲弾丸はライフル銃用に 19 世紀後半に生まれたと聞いている。

形状の問題、例えば日本の火縄銃の銃身、元は太く、先細である。元直径は大体口径の倍であるが、レプリカは同じ太さのパイプである。台、もしフルストックでない場合はどうする。カラクリ、日本でオリジナルに見たことのない形式のものが出たらどうする。など先に決めておく必要な点は多い。

4 今後の課題

日本のオリジナル火縄銃は米国、英国、オランダ、ドイツ、フランスなどで比較的によく見ることができ、オリジナルカテゴリー参加者もほとんどがこれらの国々からである。北欧、東欧などではあまり一般的でなく、オリジナル銃に接していないことから、知識も薄く、レプリカ銃製作にも問題があったようだ。

1、オリジナル銃原型をよく研究し定義化することは必要である。

先の例のように銃身、台、カラクリ、素材、などの点を、詳しく記述する。

欧州型火縄銃（ニュールンベルグ、ボヘミアンなど）と日本の火縄銃をわけると。

（ボヘミアンタイプは日本の火縄銃の元になった形式と言われるが、一部の種類のものであっただろう。従って、現在、参加してくる銃は明らかに異なる種類の銃であるという観点で。）

2、レプリカ銃の許用範囲を定義化する。特に近代的な素材、機構に関してMLAICが現在は具体的かつ詳細になっていない内容をまとめるであろう。特にサイズも問題も。大型小口径傾向がみられる。現在、最小口径は国際ルールでは「ワンモンメ」9mmとされている。

（結論）

数に状態に限りのある日本の火縄銃、短筒は年々、オリジナル銃よりレプリカ銃のカテゴリー参加者比率が大きくなることは間違いない。

欧州、アメリカの銃器メーカー、個人のガンズミスは熱心にオリジナル銃に近いものを製作すべく日夜知恵を絞っている。日本チームとしては日本の銃に関しては自信をもって発言できる知識を滋養しておくことが肝心である。とりあえず、日本に火縄銃に関しては具体的に提起する以下の問題は次回の理事会にはかり、1、日本の火縄銃の定義 2、セットトリガーの是非を、国際委員会で検討してもらいたい。

(付記) 第24回世界前装銃射撃選手権大会は2010年8月15日―21日の間、ポルトガル、バルセロス郊外のフェベンカ総合射撃場にて開催され、24カ国、計383名の選手が参加した。参加種目人数は1653名で、日本のタンツツ競技には70名が参加した。日本からは、常定正チームキャプテンを含み5名の選手が参加した。



拳銃競技 25m とクレール射撃競技の様子

(参考と協力)

ブラックパウダーハンドブック

アメリカンライフルマン誌

デキシー・ガンワークス・カタログ

日本前装銃射撃連盟 ML S A J A P A N

国際前装銃射撃連盟委員会 M L A C I

ポルトガルライフル射撃協会会長ルイス・モウラ博士



各国チーム